



高  
一  
書  
六

1冊5  
508  
62









右馬女子也云或人曰林依渡身信勝ハ孫女子也  
云云傳ハ云同郡同希津村云與寺制札ハ織田  
安房守秀後及信長ハ織田信重等所也前  
將軍長輝公前内大臣信雄公ハ東照神君御  
代ハ朱章と稱ス云百餘石一斗  
之位中將志名ハ御制札并ハ朱平河

○春日井郡 枇杷鴻橋長サ百十一間 東ノ大橋宇九  
間西ノ由橋  
二十九石也 元和八年 亥村民ハ掃治の料と端々蓋  
一 此時新橋と名一 流下流河井文助河野辰助

舊田忠為永田清為等交テ下小岸村内古堤  
古道云為料地云 橋の内東岸ハ枇杷治村

氏掃治一 西岸向小岸村の氏掃治と  
寛文二年壬午城南平本松の路市井と開キ云

此時刑罰の場と名井郡古野云  
同五歳己尾取橋と北の五尺橋一依屋の路と改メ云  
同七年村小牧驛市井と改メ云 毎年四月

○本列春日井郡小田倉赤津村ヤキモ益陶の竈セ口同庄  
瀬戸村に十二口ありて磁器と焼石に常化し祖母

懐の石六當所の門あり 園林禁ありて令に此がれ  
元とを不得又青繪 青の繪 此地に産を物  
男邦より海を多給に比をいふが  
木村真人正氏高 性平家式権系先祖今川家臣也ト

尾外一名村任人村門以有 木村一名為稱号ト  
又有大崎村廢流 大崎

大村真人正 效ハ夫言 木村常陸分高宗 仕豊臣家

大崎与兵衛 效ハ夫言 大崎玄蕃九一宗 初ハ守衛門仕福嶋  
正則ハ子孫有記列

大崎半左衛門 大崎与左衛門高城

女子千賀志摩守信親妻 大崎半四郎高一 仕福嶋  
正則

○或人問 文照院殿の由実母初日蓮宗を葬  
まゝせられし 常憲公此令に依りて東叡山に  
改葬ありし 准后の由法名とありて授まらば  
ありし其法諱如何と尋問は 台家の信よと  
中て靈會日鑑記よりし 長昌院殿贈從一位天竺  
台光大姉 寛文四年甲辰  
二月廿八日逝 由改葬の由 由信位此興  
ありし 越智氏の由女よりん左春 癸巳二月廿四日  
二十八月に至る  
五十四の由法名二万部の由讀經ありし 是レ  
文昭公 沙遺令と云ふ

○馬の一歳を馬音、二歳を駒音と云ふ。三歳

を駒と云ふ。四歳を駒と云ふ。阿湿婆の馬の林は諸ありらこしにて馬を産む

所を色し。其中支那中後の音にちるよし良馬と

也。大抵西北方に産む者勝る。東南方に産む者劣弱を我國の東北に産す。者と

良とを梅とにりらう。西北の地は寒に東南は暖なり。我國東部の國寒多ト云々此馬を國に生

○牡馬に交りて生む。子と騾と云。牡馬の駒に交りて

生むを馭音騾音と云。牛に交りて生むを馭音騾音と云。是等此

と云。牡牛駒に交りて生むを馭騾と云。是等此類。我國より不聞

○羅文集二十。尾張中納言義俊と云。是ハ元和三

年八月の事と云ふ。不有利の字の誤也。我致と云。此事のれなり

○尾侯引雨の雨幕及び白旗は侍のせり。これを

慶長五年五月駿府にて致に授まふせられと云

○南明院殿 光空玉大姉

豊臣秀吉の妹婿の太神君 天正九年庚寅正月十四日薨  
葬洛東福寺中南明院

○弘治 二年丙辰 正月十五 家康公駿府にて 水元孫徳川治郎

三郎源元義と号し 初、関口刑部少輔親長

女子のめりり筑山殿と号し親長は合川 国崎三郎信康

母堂あり 天正 七年 八月廿日 故ありて 遇害

○清須合戦記

足利將軍尊氏天下兵馬ノ權ヲ執ラレケル頂

其氏族斯波高経尾張國ヲ領ス 足利尾張ノ守 家氏ノ孫ナリ

号玉泉 寺殿 其子治部ノ大輔義將治ノ二條勘解由

小路氏衛陳ク居ス彼テ武衛家ト稱ス其ノ子

從三位左兵衛督義重其子右兵衛督義淳其

弟從三位義卿其子治部大輔義健カチに至ル

尾張越前兩國ノ守護に補セラレ越前ハ

甲斐氏ノ下ニ尾張ハ織田家ノ遣ニテ守

護代トセラレケル長祿四年義健卒ニテ嗣

ナシ其族大野祿理大夫ガ子義敏ヲ継嗣ト

ス斯波元兵衛依ト稱ス然ルニ家老甲斐朝



倉織田等カ仗義敏ト不合シテ廢之。澁川左  
兵衛仗義紀カ子義廉ヲ迎ヘテ斯波ヲ家督  
トス是ヨリ義敏義廉互ニ争テ乱ヲ発シ浴  
中物忽ナリシ應仁元年二月義廉管領ニ補  
セラル然ルニ山名細川カ凶乱発リテ義廉  
山名宗全ニ与ス是ヨリ天下大ニ乱レテ合戦  
止時ナシ文明五年宗全及細川勝元死シテ  
京師軍ヲ統ル大将ナカリシカトモ兩黨猶  
對陳シテ相闘テ同九年十一月諸軍各京ヲ

去テ自領ノ國々ニ皈ル義廉於此尾張國清  
湏城ニ入リ其子左兵衛督義良其子治部  
大輔義達ト称ス永正十一年八月大河内備  
中守貞綱ガ援兵トシテ遠江國へ進奈三河  
間城ニ籠ラレシカ御下軍破シ降ヲ乞テ  
飯岡セリ飯岡川  
氏親也是ヨリ成衰ハ其子義統ニ  
家督ヲ讓テ大永元年卒セラレ義統治部大  
輔ニ任セリサレトモ家凡衰ヘテ家老織田  
大和守入道常祐其弟同幡守盜國政ヲ執

リ常祐天文ノ初ニ死シシ其養子孝五郎信  
友家ノ續ケル天文二十三年ノ頃義統ノ家  
人楽曰弥次右衛門某名古野弥五郎ト謀  
織田ノ信長ニ申シ遁シテ彦五郎ヲ誅セシトス  
義統モ守護ハ名ノミニシテ彦五郎專ラ  
逆威ヲ振フ事ヲ思ヒ信長ト内々合セラレ  
シトカヤ築田石古野先主トシテ信長ノ  
兵士七百餘騎ト共ニ清瀨城ヲ攻レサレトモ  
彦五郎カ人数強クシテ城ヲ拔ニ由テ十ク

一旦和ヲ講シ軍ハ散レケリ義統ハ本丸  
ニ居玉テ面ハ彦五郎ヲ援ル体ナリケレバ  
信長ト内通ノ事アレハ彦五郎終ニ殺サ  
レナント凡聞アリケリ同年七月十二日義  
統ノ若君堀江ノ邊ヘ河將ニ出テラレ家人  
過羊供ニケレハ彦五郎能將分ト思ヒ己カ  
家人織田三位房坂井大膳亮河尻左馬助河  
原兵助等ニ示シ合セ急ニ本丸ヘ取カケテ  
攻ケル森刑部少輔政武同掃部助丹羽左近

柘植宗元同明善河弥等内外ニ走リ回テ敵  
數多討取其身モ各殺死ス賊徒猶重リテ攻  
寄シカハ館ニ火ヲ掛義統ヲ始旧老ノ臣一  
族三千餘人一同ニ賤カキ切リテ矢ニキナ  
餘代相續ノ高家一將ニ亡ヒラレケルコソ  
悲シケレ若君岩龍丸ハ河邊ニテ此ヲ聞直  
二名古屋へ遁シテ信長ヲ頼レケレハ先  
天王坊ニ入レマヒラセラル其弟君ハ生捕  
ニナラレシガトカクシテコレモ名古屋へ

遁ラレシ去程ニ信長彦五郎ガ逆思ヲ声ニ  
勢ヲ集テ同七月十八日清湊へ押寄ラレ先  
手ハ柴田權六勝家足輕頭ニハ安孫右京進  
忠頼藤江藤藏太田又助木村源五郎芝崎孫  
三郎小田七郎五郎天野佐左衛門等許多ノ  
兵士我先ニト追ミケリ城兵ハ山王口へ出  
張テ禦キ闘シカ究竟ニ名古屋勢ニ追マク  
ラレ四方へ敗北シ或ハ追討ル者殺百人  
ナリシ乞食村誓願寺前ニ湘文ヘテ防キケ

ル賊ニ終ニ追立ラレテ一同ニ城ニニケ入  
城ノ兵討レシ者ニハ河尻右馬允織田三位  
房雜賀修理進原源左衛門尉安食九郎兵衛  
ハ牧平四郎高北傳次古沢七郎左衛門尉等  
ヲ初八十餘人ナリ御方義理ノ平合戦ナリ  
ケレハ誰カハ残ルヘキ武衛恩顧ノ諸侍面  
モフラス攻撃ケル其中ニ由宇彦市トテ義  
統サシモ寵愛ノ童生年十七歳ナリシカ  
謀叛ノ張本三位房ヲ步取ケル 頼ヲ本城ヲモ

攻ラルヘカリシニ緒川ノ城主水野氏ヲ駿  
列金川家攻ラレ、由聞ヘシカハ大兵ヲ國  
境ヘ入テハ天事ナリト信長思案アリ  
テ一ツツ外留斎藤山城入道ヲ頼名古屋ノ  
留主ヲ請給ヘリ天文二十三年正月斎藤カ  
家人安藤伊賀守ヲ大将トシテ田宮甲山安  
斎熊沢物取等都合一千餘人ノ兵士名古屋  
ニ到着セリ同二十日志賀田幡ノ兩郷 陳  
トラセ 翌日頼ヲ信長ハ堺川工出馬アリテ

村木ノ城ヲ攻取駿列勢ヲ追ハライ給ヒテ陸陳  
アリケル同二月清湏ノ家老坂井大膳和ヲ  
乞織田孫三郎信光ヲ城へ移シ彦五郎ト兩  
守護代ト仰クヘシト申ケレハ信長ハ密儀  
アリテ和腔ニソ成リニケル同四月十九日  
信光清湏へ移リ入南九ニ居セラル羽三二十  
日大膳カ兄坂井大炊助ヲ城中ニシテ誅セ  
ラシシガハ大膳ハ城ヲ落テニケ去リケル  
彦五郎モ叶ハシトヤ思ヒケニ近習五六輩

ヲ召連給出ニト支度ニケル間ニ兼テ相承  
ノ狼煙ヲ揚ラレケレハ信長頓テ出馬アル  
名古屋勢我先ニト清湏へ馳来リテ本城ヲ  
取巻頻ニ攻撃ケレハ彦五郎近臣マテ討セ  
獨身トナリ密ニ城ヲヌケ出神明前燒残リ  
ニ在家ノ屋上ヨリ逃ニトニケルヲ天野佐  
左衛門鑓ヲ以突落ス森三左衛門頓テヲ  
サヘテ首ヲ取ニケル先祖代々ノ主君ヲ殺  
セシ天討ナリ諸人ニコソニニセヨトテ御城

川ノ端ニ者ヲ掛ラレシトカヤ斯テ信長ハ  
清須ノ城ニ移リ義統ノ若君岩籠殿元版  
ナサシメ武衛治部大輔義銀武右兵佐ト称  
シ本丸ニ居マヒラセ尾張屋形トテ崇敬ア  
リケリ永祿四年三列ノ吉良屋形義安ト  
會盟ノ儀ヲササシメ一カニ筋目ヲタシ結ヒシ  
ニ今川家吉良ノ尾列へ屬セシヲ憤リ軍  
ヲ催吉良ヲ攻シカハ義安出奔シテ清須へ  
来リテ容食セリ同年當國戸田庄ノ高家石

橋左馬ノ頭義忠河内城版部左京亮ニ与ヒテ  
武衛吉良ニ内通シ信長ニ叛逆ス此事露頭  
アリシ種程ニ信長腹立有テ恩知ラスノ愚人  
トモナレハ一々首ヲ刎ヘケレトサスカ家  
ノ主筋ヌハ由アル高家ノ果ナレハ余ハカ  
リヲ助クルソトテ武衛吉良石橋三人ヲ三  
方へ追放タシケル足利家ノ裔近年高家ノ  
人々モ甚微々ナリシカ此ニ至リテニ家一  
時ニ浪人トナラシケル石橋ハ版部ヲ頼テ

長嶋へ隠し吉良ハ駈列へ下リ今川ノ家人  
ナル武衛モ石橋ト同長嶋へ遁シラレ  
シニ幾程ナク落城セシカハ伊勢へ遁シ河  
列ニ漂泊シ箱髪シテニ枋軒ト称セシ元龜  
ノ頃富山昭高ニ依様々罪ヲ謝セラシ  
カハハ地ヲ授ラレシトキコヘシ義銀ノ弟  
義永ハ或義次三列中山ニ隠居ラシカ後ニ織  
田信雄ニ仕ヘラ津川玄番先ト称セシ同年  
或書曰玄番ノ先ニ石衛門依入道謙介ト云アリト云  
ノ秋信長上洛シ將軍家義輝公へ参勤ヲ

遂尾張守護職ヲ拜セラ是ヨリ尾張ヲハ一圓  
ニ進止アリケルソ目出度アリケル

又津川政太郎云者アリ是三枋軒伯父ト云

○尾張國ハ斯波の領ラテ織田氏守護代ニ居  
任ヤリシハハ信長の時より始リヤ曰其始未詳梅  
に應永の頃ハ吉賀和美作入道建照と云ハ一者日代  
のやにス他と云永二十六年六月樊田社廷宮記又社務管領  
吉賀和入道と云ハ社事ヲ領ヤ者ト云フカ  
又千秋内通政兵部卿國務ニ預リシト云ク是トハ野  
田殿ト稱シテ樊田大宮司職アリシ比時分マ織田氏

尾列に在りし足之傳は 國府系百證文 尾に織田氏に 永享の末に織田氏

本列に在任故予々永武衛家の古く知状あり又曰

尾張國美北郷事早任 綸旨次、閏九月晦日

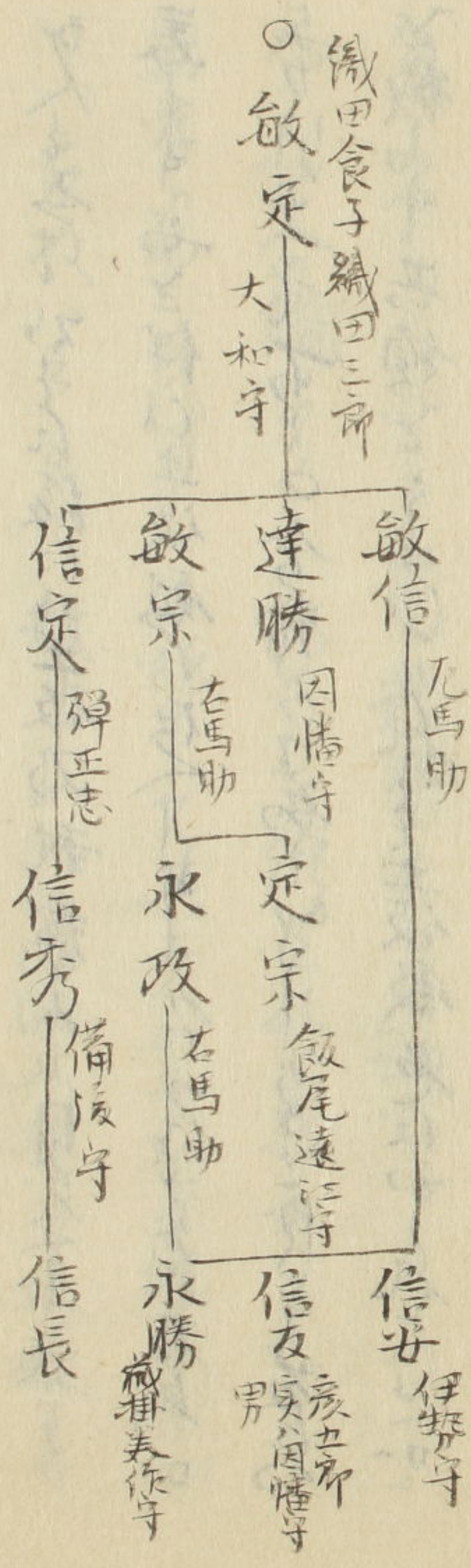
御教書元旨ハ可取沙汰ニ 依見殿南所方雜掌

嘉吉元 十月七日 元阿判 義信朝臣 入道

織田三郎

織田三郎名ハ敏定後大和守ト稱せしニ蓋本列 守護代トて來任ヤリ子孫長ク本貫ト移して本 列奥ハ居ヤリト又傳ハ永享三年の比織田大和守

遼勝一作連勝 天文廿二年の比織田大和守勝秀之伝 人有リ名古屋法華寺の證文に傳 大永三年七月十六日 天文三年九月廿證文 亦數本同矣一變ありと



○濃列 斎藤山城入道通之始京の油賣メリ濃列任



来一土岐の家老永井友房の方へ出入深と云ひ其を圍  
り入ると云けり其後には土岐の乱を以て目録之に京より  
義孝と云ふと伴ひ土岐殿に侍りし事あり右の如  
き方にありて其の合戦より傷しりし事ありて友房  
と戦ひて其領と云ひしれども土岐殿色にむねてこ  
しありし事より自永井太事等の尉と稱し次子に瀧邊  
りて賢に土岐家と亡し永井敏常守の法と云ひて  
又より永井山城守と名乗る事ありて京より召し下し乱を  
まひせり也と云ふ書と云ふりけり女乱の遺腹の男子と云

也一と山城守の子と云ふ足利治部大輔義親あり  
その存実より生長平次隆信と稱し久光の嫡子に實  
子あり其の初めはと云ふ後中ありと云ふ事義親  
も其父と云ひしに或者ははけて曰是ハ土岐殿の男子  
ありと云ひしことあり乱を主と云ふ事あり  
云々其父の讎ありと云ふ事ありと云ふ事あり  
不孝の如き事ありと云ふ事あり其子の事と目根其事と  
云ふ事ありと云ひて殺すに父の山城入道と云ふ事あり  
死候し強盛威と云ひし其子龍興の時海田信長と



一 赤松山城守利政と名乗る者ありて難後して地橋のま  
福一及び法名して法所或夫ありて其弟と今頃此  
城主なりと名井 隼人仇と稱せしむとせと去汲大膳  
右史頼房に嫁せし親を奪りて死て當國と追出  
し乃て之を濃州と領せし嫡子治部大輔義毫  
二 寛喜年次に曾孫と命そ之のまじりて之を去之と是  
一 義毫と照し久恨憤て弘治二年の春道三將將の  
討つて日根也 伯中も弘就とふ家人は命して才  
二人と殺害と道三大に怒りて義毫と討てて之を討し

うりてめ義毫却て逆家に稱する城小押多て父とせむ  
同年四月二十日鷺山にて父子合戦あり道三打まけ  
敗軍せしむ小牧源次とふ者終に道三首とたらしむ  
これより義毫濃州の守護と稱して暴威とゆふい永祿  
四年に病死せしむ 義毫子義貞備田位をたてしれり  
元正世武家の行記曰矣とありてそのまじりて我  
東照神君所をのりしむ七十年前キヨてはつたありて  
又少しとありしとて之を家々の名後區々して一頁あり  
きこののこ多しとありしとて之を家々の名後區々して一頁あり  
後ハコトとて道三の所多しとありしとて

○ 秀吉檢地元禄尾張國五十七萬一千七百二十七石

朝鮮

兵士一千五百人

入道内大臣平信雄

常真

兵士一千五百人

武藏大納言

河津

惣兵三拾万三千五百人

名古屋在陳十萬三千三百人  
渡海軍勢三萬一千二百人

○竹腰道環濃列齋藤の家人也道之父子親の時道之よ

討八月  
二十日

或ハ侍ニ道致ハ依々木の一流初ハ竹腰御守正助ニ稱シ

土波頼隆の臣アリ道之濃列ニ有テ後仕 其頃金森

某の才原氏某ニシトシトを原氏の子竹腰助九郎ト稱ス

其後氏没成の後浮田家ト仕テ故方ニ居テ其子山崎の四

志水又菟君セリ是竹腰山城守正信入リト云或人曰竹腰  
道環も依々木の中流アリ依々木と和語通ル竹腰と越  
前ト云意ヲ初ハ竹腰ト稱スト云或人曰道環濃列  
竹腰村の人多ト云是カ事ト云

○三国淨業列祖

釋迦牟尼如來

彌勒慈尊 | 阿難尊者 | 舍利弗尊者

文珠菩薩 | 馬鳴菩薩 | 龍樹菩薩

天親菩薩

以上天空

唐王流

佛圖澄

道安

惠遠

菩提流支

惠寵

道場

義淨

惠日

曇鸞

大海

法上

道綽

善導

兼遠

法照

少康

智覺

省常

宗續

唐滿流自此出

以上農旦

空也

良忍

法明

融通念佛祖

源信

源空

自此分諸流

以上日本

○圓頓大戒相兼

天口正流

本師釈迦大師

龍樹尊者

天竺

四悟大師

北齊

止觀大師

南齊

靈惠大師

總持大師

童安

因達大師

全真大師

明寬大師

四道大師

興道大師

傳教大師

日本

慈覺大師

長意園梨

慈念僧正

慈忍僧正

源信僧都

禪仁商梨

良忍上人

寂空上人

圓光大師

名源空号以法然坊有普通菩薩惠光菩薩  
通明回師光照大士等入證号

右蓮社始祖源空上人相承一流也山門諸流今且先幸

淨土宗流畧圖

圓光大師

重證東漸大師 海星

聖光

鎮西流 筑後善清寺

良忠

記主禪師 鑰倉光明寺

白蓮社

盧山義 入永

證空

西山派 善峯寺

淨音

四谷 了音 八幡

觀智

良曉

白旗義

定譽

了譽

無量山 壽經寺

百譽

三卷山 增上寺

良辨

名越 良譽 良順

隆信

深平

淨勝

本山

觀鏡

末山 熾誠

證憲

熾誠

他阿

遊行祖

觀真

正乘

實信

實生

聖達

見性

長所 廢義

隆惠

道念

乘信

寬入

觀日

觀明

正乘

見性

廢義

聖觀

道念

性真

藤田

礼阿

一條

道充

三條

慈心

小幡

慶蓮社

盧山儀

招蓮社

諸行往生義

滿願

廓鉸

慈觀

不阿

不忠

如一

回師

修觀

道所

佛教

遊觀

隆寬

多念義  
長樂寺

重源

末大寺

入道

信空

白川

正信

儀峨

勢觀

智恩院  
二世

智慶

敬日

慈信

信樂

隆慶

能念

信寂

朝日山

長西

九尊寺諸行  
本願義

聖覺

母后院

幸西

念義

正定

明信

入真

善性

勸信

如輪

理因

覺心

空寂

十地

道教

上教

證忍

覺阿

戒因













帝王院經調縁也大紋高麗へリハ親王大臣  
用之此下更不可用公卿小紋高麗縁六位  
侍黄縁也四五位雲客用紫縁海人藻芥下同  
今神家僧侶之夕リニ大小紋高麗ヲ用其  
備甚哉

古今傳授

定家為家為氏為世 頼阿 經賢 亮尋  
亮惠 亮孝 常縁 宗徳 實隆 公條 實澄  
玄旨 知仁親王孫  
通勝中院 後水尾院 大上皇  
亮廣鳥丸

父亮孝より亮憲僧都に傳へし一傳宗祇より  
宗長及び牡丹苑に傳へし二流稱名院公條より  
九條樋道公と紹巴之傳へし三流あり  
亮友公沙傳受れし時より七代あり  
おのりいきや時をきぬほど忘るる満の  
妙なり道に傳へし

江國院三品羽林郎西巖淨周 織田彈正宗也  
天德院一品前右相府恭巖淨安 信長公也  
熱田龜井山圓福寺ニ有此位牌

○淨土宗ハ家系しく源空ニテ一宗の道ハありし  
 ちやま末子流ハ流ハ流ニ破に鎮西の聖光ハ流ニハ  
 天台の血脈と傳へて山領戒と授け侍りて血脈の  
 護とスルニ

本師 釈迦牟尼如来

南岳 惠思大師

天台 智者大師

章安 灌頂大師

智威大師

惠威 大師 玄朗 大師

妙樂 大師

日本 道邃 和尚

慈覺 大師

長意 和尚

慈念 僧正

慈忍 僧正

源信 僧都

元祖 禪仁 阿闍梨

良忍 上人

教空 上人

圓光 大師

聖哉 上人

記主 禪師 代々

くくのしく 斗て封々侍 西山の善惠ハ流ハ  
 いとよ念仲の祖師とて侍りて侍りて血脈  
 いられ上に一大團とる 南無阿弥陀とナッる人  
 書キこトトに

登遣 教主 釈迦久佛

普賢 菩薩

来迎 撰取 阿弥陀佛

文殊 菩薩

證明 護念 六方 諸佛

弥勒 菩薩

馬鳴 菩薩

竜樹 并

天親 并

菩提 流支 三藏

曇鸞 大師

道綽 禪師

善導 大師

懷感 禪師

法照 禪師

少康 法師

源信 僧都

證空上人善惠也

日光大師  
淨音上人代々

ふひり 流西流、白旗 名越 藤田一条三条

十幡の流ありとも 登知恩院と也中寺と也り

西山流 西谷 八幡の二流ハ東山禪林寺西山光明寺と

中寺とも木山流ハ洛誓願寺ありとも 深中流の

寺ハ絶しと也此真言寺とありて一一流の中寺と

も是とも 誓願寺退去の地ハ此外多流一二山原原

本願寺の血脈ハ七祖と云

龍樹 天親 曇鸞 道綽 善導 源信 源空

右或改坊あり又ハ多ありて字相々々々

○尾候引両の内幕布及白旗 池傳へさせたりこれ  
慶長十九年 三月 駿府にて 教公に授まらせ

○唐發弓ノスビキ也 戦国策ニ見ヘタリ

○元禄十五年二月

大樹御母堂 桂昌院尼公御位陞 勅許

從一位藤原光子

勅使

院使

宣命使

固身

地下二人

醍醐權中納言藤原昭尹

東園宰相藤原基長

石井少納言平行康

土御門三位守部泰福

山内記

青木縫殿

尾列中嶋郡 請列城主斯波氏

斯波尾張守源家氏

斯波尾張守源高經 家氏曾孫也

從三位右衛門督源義將 号法華寺殿

正三位右衛門督源義重 号與徳寺殿

正三位治部大輔源義淳 号心照寺殿

從三位右兵衛督源義敏 義淳曾孫自是任右兵衛府 故曰武衛家

我敬公以來仕右兵衛督者絶斯波之意歟

○尾張三位中将志吉卿の小字子福松君と稱也

○芙蓉香方 錢十五

沉香 一兩 檀香 二錢 片連 三錢 水腦 三錢

合油 五支 生結香 一支 排中 五支 芸香 一支

耳麻然 五分 唵叭 五分 丁香 二分 郎台 二分

藿香 二分 定陵香 一分 乳香 一分 三奈 一分

撒醋蘭 一分 攪油 一分 榆麵 八支 硝 一支

右二十香和印或散燒

天和は朝鮮人來朝の時 我公へ獻し土

産の中は芙蓉香有し香いと云はれり

そく作りしがけ方なり



○泉列坡北に皇子が飢乏あり北の辺に首截地  
藏と呼石像あり 東海に少砂の西ありたす首截  
地をいふあり 石の自破たるを

石の自破たるを

○德音寺殿義山宣公

木曾義仲の法名あり其塚江而西米津系あり  
今義仲寺と号し天台宗の僧守より共香火  
の場ハ信列木曾宮越あり日照山德音寺に於て臨  
洙汎の寺あり由干村氏の家系に於て

○西田前相公細重の御墓を増上請寺の後の山に

遷しをせり

大納言家家宣の冥考あり

延宝六年九月十四日薨ス葬ハ傳達院ニ号ス請揚院  
曰答天安永和大居士

又先妣長田院夫人の御牌子浅草の牟毫寺日蓮  
にあり

○林佐渡守敏智信勝依平贈相国之命一監以尾列  
那古野城一後有故菴居和列梶折村而卒号ス  
養林寺殿矣雄玄規居士十賀氏某者本林氏之  
仍於尾列一建玄規之香也場以某氏族僧長  
為開基祖 安長始信京師知恩寺賜紫衣僧也

稻葉越智宿称敏後高田林通村之裔也  
尾府下林氏多其族也

○熱田湊 常夜灯

尾張国吾陽市郡

件灯堂者為使往來之船有使千夜渡也是  
即依十七文成瀬阜人正藤原正成遺命而正  
房所營建也并寄也五十畝之田城於大子堂以  
為膏油之資矣所比翼至千千一成無斷  
絶矣

○銘曰

挑一点灯之  
地斗南針

致一万人利  
却在在一房二

寛永二乙丑歲臘月十七日 浴下杏菴

○武家大橋氏三流あり一流平貞常の高へりて尾  
筋津治の住り一流八宗良親王の孫良王君の孫一  
して流一なり是津治の住人なり

大橋中務太輔源定廣此女拜領買正利の室大永  
六年尾州蜂須賀村テ小一六  
利政と生田寛永系圖見ハタリ

流ハ近江侍なり

林駿河守通政

林宗兵衛正三

母大橋清兵衛重長女実ハ妹也  
林佐渡守通勝ノ養子

林内通正成

稻葉丹後守正利

母春日局惟任日向守  
奇藤内藏助政治母也

稻葉美濃守正則

○問、十香或十種香之、何、集、香、也  
谷、印、海、と、梅、と、小

梅檀 <small>檀羅也</small>	沉香	蕨合	薰薩	爵金
白膠	青木 <small>木香也</small>	零陵	耳松	鷄台 <small>丁香也</small>

桶狭間古戦場之圖





○故従四位下 行治部ノ大輔兼駿河守源ノ朝臣義元

父、増善寺修理ノ大夫氏親、朝臣母中ノ御門前、権大納言  
藤原ノ宣胤卿ノ女

永禄三年庚申五月十九日横死号ハ天澤寺殿秀峰哲玄大居士

○桶狭間村ノ小屋形狭間忍ノ所謂田樂ノ窟ノ道程合物場ノ竹地狭間

丹家一里余、越善正寺一二十七丁余、中嶋一二十町余亥

鳴海一二十町余、有松一八丁中村一里半余、九根一里半

鷺津一里半、大高一里半、水懸一里半、桶狭間、大小同異、矢ノ如ク、下ノとスル、所ノま

み略し、小番ノ造リ、てにろ、り、のこ

○名古屋合戦記

後栢原院ノ御宇駿河ノ屋形今川修理ノ大夫氏  
親尾張守護斯波治部ノ大浦義達ト互ニ敵シ  
テ合戦ニ及其比三河国卧蝶ノ地頭大河内  
備中守久綱ト云シハ元来吉良殿ノ家人也  
近年自立シテ威ヲ振ヒ國中ノ兵士ヲ懐ケ  
テ駿河領ヲ窺今川殿兵ヲ以テ討之ヲ為給  
ヘリ大河内尾列ヘ礼ヲアツクシテ斯波殿  
ノ援ヲ請ヘリ義達諾シテ從之大河内々遠  
江国引馬ノ城ニ楯籠リテ種々ノ謀畧ヲ企

ツ今川殿是ヲ退治セントテ永正十年三月  
一万余ノ軍兵ヲ率ニテ遠列ヘ發向斯波殿  
ハ深嶽ノ城ニ出張ニテ軍評定アリシ今川  
殿ノ家臣朝比奈十郎恭以夜ヲ侵テ襲之ニ  
カバ尾列勢敗北ニテ奥山ヘ退キ遁ル同十  
一年三月大河内重テ引間ヲ取返シ池田入  
野邊ヲ押領シテ却テ威強盛ニナリニキ又斯  
波殿ノ出馬ヲ請ヒケレハ義達再進發アリ  
清須ノ城ニハ織田大和守敏信ヲ留守トシ

給へりサレトモ織田伊勢守信安遠列進發  
ノ事ヲ止シニ義達許容ナカリシカハ不和  
ノ事出来テ上四郡ノ兵ハ參陳セサリシ故  
斯波家ノ軍無勢ナリシ然レモ大河内ヲ援  
テ引河ノ籠城ト聞ヘシ同年六月今川殿三  
万ノ兵ヲ率シ城ヲ取ツ卷テ攻撃シケレバ同  
年八月十九日終ニ落城シ大河内久網并ニ  
其弟臣海新丸衛門尉道綱高橋三郎兵衛尉  
正定中山監物等千余人討死セリ斯波殿ハ

降人トナリ普濟寺ト云 禪院ニ入ッ剃髮シ給  
ヒケレバ一家ノ好シニ命ヲ助マヒラセ尾  
列へ送り還サシケル北時向後駿河屋敷ニ  
對シテ引引ベカラザル由起請文ヲ留テ飯  
田アリケル依ラシ今川殿其末子左馬助氏豊  
ヲ指添テ尾張へ指上セ終へリ 義達ハ既ニ  
隱居アリシカハ若君ヲ織田大和守以下補  
仇シテ武衛ノ家ヲ相續ス是治部大輔義統  
ナリ大永ノ初今川殿ヨリ尾列名古屋ノ城

ヲ築丸馬助ヲ移シ入テ清湏ノ押ニセラル  
義統ノ妹丸馬助ニ嫁シケル上ハ東西隔ケ  
ク中々静カナリケル其比勝幡城主織田弾正  
忠信秀トテ清湏三奉行一人アリ丸馬助ト  
毎ニ親シトニ連歌ヲ好マシエカバウツ付  
アヒテ名古屋清湏ヨリ使ヲ馳テ遊バル扇  
箱ナトニ懐紙ヲ入テ持アリキケルカ有特  
洪水ノ折柄使者小田井ノ川邊ニ渡リケル  
トテ彼箱ヲ流シ矢ニケル左馬助本意ナキ

事ニ思ハレケレバ彈正忠ニ申贈ラレケル  
ハ道ノ程道カラザレバ付相シ待カ子侍ル  
殊ニ先ノ如ク懐紙ナド矢ヒ候事モアリ願  
ハ十日計モ名古屋ニ留レヨ心靜ニ連歌ニ  
候ント申サレケレバ彈正甚悦其後ハ名古  
屋ニ往城中ニ一ノ間ヲ預リ或ハ廿三日又ハ  
十日餘モ滞留ニテ連歌ニ茶湯シシナドセ  
ラレケル亨禄五年ノ春例ノ如ク名古屋へ  
来リ数日留リ居ラレシカ本丸ニ向ニ窓ヲ

切、閑カル。今川ノ家人怪テ御館ニ客人トシ  
テ在ナガラ、矢、挟、間、シ、切、ル、コ、ソ、心、得、子、ト、テ  
其、椽、シ、申、ケ、レ、ト、モ、左、馬、助、事、ト、モ、セ、ズ、此、ノ、人  
ニ、カ、ギ、リ、別、心、有、ル、ベ、キ、ト、モ、覺、へ、ス、風、流、ノ  
仁、ナ、レ、バ、大、木、ニ、覆、ヒ、タ、ル、柳、ノ、九、ノ、挟、サ、ヒ  
夏、ノ、凡、ノ、便、<sup>多ク</sup>ナ、ド、ニ、窓、シ、コ、ソ、閑、カ、ル、ラ、メ、ト  
テ、更、ニ、ト、ガ、メ、ラ、レ、サ、リ、ケ、リ、然、ル、所、ニ、彈、正  
俄、ニ、大、病、請、ラ、シ、ト、テ、彼、ノ、家人、走、リ、回、リ、清、瀨  
ニ、告、ゲ、勝、幡、へ、申、シ、ラ、ク、リ、ケ、ル、ホ、ト、ニ、三、月、十

一日其親族家人多来テヒシメク夜ニ入テ  
猶家人来リ重クシガ今市場ノ方ニ火事有  
リトテ城中サワギ立ケル折節南風ハゲシ  
ク若宮ノ社天王ノ社シ始メ天永寺安養寺等  
ニ火カ、リテ城へ火ノ子シ吹付タリシガ城  
ノ東南ノ方ヨリ時シ作りテ攻ヨスルホドコ  
ソアレ柳丸ノ方ニ時ノ声シ合テ火シ放勝  
幡ノ兵士甲冑シヨロヒ本丸シ攻ケル間城  
ノ中ニハハカバカシキ士卒モナク内外ノ



敵ニ包<sup>ミ</sup>レアキレサハギケル 廣キ竹嶋等ニ  
在リケル今川ノ家人初ハ火事ノ為ニ集リ  
タレバ物ノ具ニタル者一人モナリ襲兵ハ  
爰<sup>コ</sup>彼<sup>シ</sup>ヨリ馳出<sup>ラ</sup>ク追ツメケレハ何モ素<sup>ス</sup>膏<sup>ダ</sup>  
ノ歩行武者心バカリハ勇シカドモ敢<sup>ム</sup>ナク  
皆討レケリ 丸馬助ハトカクシテ城ヲマギレ  
イテ茶師寺殿部<sup>ノ</sup>丞<sup>ヲ</sup>以テ命<sup>バ</sup>カリテ請得  
テ母方ノ縁<sup>ヲ</sup>便<sup>ニ</sup>シ京都へ上<sup>ホ</sup>ラシケル 彈正忠  
ハ計畧思ヒノマニ為ス<sup>ニ</sup>名古屋城ヲ取<sup>リ</sup>頓<sup>カ</sup>テ

移リ入ラシケル 清瀨ニモ内々今川我國ニ來住  
ノ事口惜ク思ヒ給ヒシカハ知スカホニテ過ラレ  
ケルト聞ヘシ 天文三年ノ正月信長此城ニ誕  
生アル 御女儀ハ土田氏ノ女也 同四年同郡古  
渡村ニ新城ヲ築テ彈正忠移ツル 若君ハ  
猶名古屋ノ城ニテ成長アリケル 同廿三  
年七月十二日 織田彦五郎信友斯波殿ヲ  
殺セリ 翌年弘治ト改元アル 四月二十日  
信長兵ヲ率ヒ清瀨ヲ攻 信友誅ニ 伏又是

ヨリ 信長清瀨ノ城ニ移リ 名古屋ノ城ヲ  
ハ叔父孫三郎信光ニ授ウレシニ其年  
十一月二十六日 坂井孫八郎カ為ニ弒  
セラル 故ニ林佐渡守信勝シテテ城ヲ  
監セシメ給コケリ

○ 織田信雄ヲ世ニノブヲト讀コテハ初信意ト名詔  
故信雄ニ改ラレ 後トノブヲト云ノブカト  
讀ム一ウアリト古記トス  
北畠權中納言具教卿ノ冥子信意ト云ノ人  
別ニありト云フ 説ハ非也 信意信雄  
一人兩名也 信雄北畠

の養子トシテ 初ハ具豊ト稱セ

具教の長女と  
書トス

北畠系圖 寛永十一年御撰 具教卿ノ實子にも是也

別ニ信意ト云ノ人ありト云フ 但し諸家傳  
に具教の子

信意改信雅其子親頭  
慶長八年に生と記セリ

同津談書

○ 宗 うつが にスルツボのニ字と一字に

了りや

籖

うつが  
の書に是し行み  
お行のり也

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a page from a manuscript. The text is written in a dark ink on aged, yellowish paper. The script is dense and fills most of the right page. There are some faint, illegible markings on the left page, possibly bleed-through or very light handwriting. The paper shows signs of wear, including a small tear at the top center and some discoloration or staining, particularly a large, irregular brown stain on the right page.

